

平成28年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム

「曹洞宗の文化財」

講演資料集

鶴見大学仏教文化研究所・大本山總持寺宝蔵館「嫡々庵」
共 催

会期： 平成28年6月11日（土）13時30分～

会場： 鶴見大学会館地下1階メインホール

タイムテーブル

会 場	鶴見大学会館地下1階メインホール（神奈川県横浜市鶴見区豊岡町3-18）	
13:00~	開場・受付	
13:30~13:40	開 会 コーディネーター 下室 覚道（本学教授・本研究所主任）	
	開会の辞 伊藤 克子（本学学長・本研究所所長）	
13:40~14:10 (講師紹介を含む)	基調講演 薄井 和男（神奈川県立歴史博物館 館長） 「能登總持寺祖院観音菩薩像と永光寺瑩山紹瑾禅師像」	
時 間	講 師	題 目
14:10~14:40 (講師紹介を含む)	尾崎 正善 (本研究所 客員研究員)	「宝物殿開館記念、二つの展示会 —横尾忠則個展と總持寺秘宝展—」
14:40~14:50 休 憩 (10分)		
14:55~15:15 (講師紹介を含む)	遠藤 ゆかり (大本山總持寺宝蔵館「嫡々庵」 学芸員)	「宝蔵館嫡々庵のこと —課題と将来について—」
15:15~15:35 (講師紹介を含む)	室瀬 祐 (本研究所 兼任研究員)	「三橋鎌岳作・獅子牡丹唐草彫木前机 と近代の鎌倉彫について」
15:35~15:55 休 憩 (20分)		
15:55~16:30	パネルディスカッション&質疑応答 薄井和男・尾崎正善・遠藤ゆかり・室瀬祐 コーディネーター 下室 覚道	
16:30~16:35	閉会の辞 前田 伸子（本学副学長・本研究所兼任研究員）	

能登總持寺祖院觀音菩薩像と永光寺瑩山紹瑾禪師像

薄井 和男

【はじめに】

曹洞宗の永い宗門の歴史において、本尊をはじめとする仏像や、宗祖・列祖の肖像などの彫刻が、どのように信仰され、またどれくらいの古像が伝存するのかといったことは、これまで十分に知られてはいない。

こうしたなか近年、随時行われてきた曹洞宗成立にかかわる北陸地方の主要寺院の調査や研究によって、曹洞宗の比較的早期の造像についてしだいにその状況が明らかとなってきた。

ここでは、こうした関係尊像のうち、今般の特別展「禅のかたち—總持寺の至宝—」に出陳の重要作例二像について紹介、解説させていただく。

總持寺祖院の觀音菩薩像は、能登總持寺創建に関係する尊像であり、鎌倉末から南北朝時代に活躍した院派仏師の典型的作風をそなえ、曹洞宗と院派仏師の繋がりを具体的にしめす好作例のひとつといえる。

永光寺の瑩山紹瑾禪師像は、道元禪師から瑩山禪師にいたる早期の曹洞宗では造像が稀であったとみられる頂相彫刻（禅僧肖像彫刻）の作例であり、その最も古い傑作像といつてよい

【總持寺祖院觀音菩薩像】（輪島市指定文化財）

能登總持寺創建に関わる史料に、元亨元年（一三二一）の瑩山紹瑾真筆と伝える重要文化財『觀音堂縁起』がある。これは元亨元年、洞谷山永光寺（石川県羽咋市）にあった瑩山禪師が再三の瑞夢により、諸岳觀音堂の住持定賢権律師から、その寺領などを譲り受け、諸嶽山總持寺を開創するに至った由来などを述べたもので、この諸岳觀音堂は、行基開創と伝える能登国櫛比莊の密教の古刹であったといわれる。總持寺の山号は諸岳觀音堂に由

来する。この諸岳観音堂本尊観音菩薩像が、總持寺の寺伝で、現在の祖院慈雲閣本尊観音像であるとされている。

白衣観音と呼称され、平素秘仏であるこの像は像高三〇・七cmを測る小ぶりの尊像である。頭部に宝髻を結び、天冠台を表し宝冠を被る。地髪正面に化仏を置き、白毫相をあらわす。着衣は覆肩衣・衲衣を着け、定印を結んで、両脚を衣で覆い、右足を前に結跏趺坐する。

寄木造で玉眼を嵌入し、白毫に水晶を嵌める。構造は、頭体幹部とおして耳後ろを通る線で前後矧ぎとし、三道下で割首にしている。これに両体側部を矧ぎ寄せ、脚部は横一材に裳先部を矧ぎ足す。宝髻・化仏は別材である。像内を丁寧に内削りし、布張り黒漆塗を施して、体部前後材をそれぞれから彫出した束から出た雇柄で連結し、また前材中央下部に地付きに達する像心束をつくる。

本像の全体に量感を持たせた、ややずんぐりとした正面観や、うねるような大きな衣文表現、そして構造における像内の雇柄や、像心束などは特徴的で、これらは鎌倉末～南北朝時代の院派仏師の制作になる多くの作例と共通する。

院派仏師は、その名のおり名前に院の字のつく仏師集団で、円派とともに平安後期よりの伝統をもち、鎌倉時代に入っても京都を中心とし勢力をしめし活躍したが、鎌倉後期、一四世紀に入るとその流派は鎌倉地方を中心として東国での活躍が活発となる。とりわけ真言律宗系寺院とは深い関係が生まれ、多くの造仏がみられることになるが、その代表的なひとつ徳治三年（一三〇八）の神奈川・称名寺釈迦如来立像の造像は、法印院保が多くの同門仏師を率いて行い、その中には、のちに足利将軍家に重用される院吉がいる。この院吉とその子である院広と、院遵などその周辺仏師は、足利将軍家菩提寺をはじめとする有力な禅宗寺院の造仏などを担当し、南北朝期、当代一流の仏師集団を形成したようである。この時期、院派仏師が成立させた仏像の様式は、きわめて個性的なものである。それは例えば彼らの代表的作例である静岡奥山方広寺釈迦三尊坐像・観応三年（一三五二）にみるごとく、作風では正面観のずんぐりとした箱形の体部、覆肩衣・衲衣の左右相称のさ

ばき、うねるような大ぶりの衣文、人間臭い面貌、構造では像内に設ける前後材履柄周りの束や像心束など、一目して他派仏師の作例と異なる特徴をもち、鎌倉時代の宋風彫刻とも作風の離れた独特のものとなった。この院広周辺で成立した院派様式を引く像は、時代のスタンダードとして、きわめて広く流布してゆくが、それは禅宗（おもに臨済宗）の地方伝播と深く関係しているようである。

院派仏師と曹洞宗の造仏については、明確な接点が判明はしていないものの、かなり早い時期から重要な制作のかかわっていた様子がある。

その典型例として、洞谷山永光寺の本尊釈迦三尊の造像があげられ、瑩山禅師の『洞谷記』に、三尊のうち観音を院派仏師の駿河法眼定審が父親の定守法眼の十三年追弔のため木作した旨の記載がある。定審は院の字は付かないが、定守とともに先述の神奈川・称名寺釈迦如来立像の造像に名を連ねる同派仏師で、このことから曹洞宗においても早い時点から院派仏師が関わっていたことがわかる。

總持寺祖院観音菩薩坐像は、こうした院派仏師と曹洞宗関係造仏の深い関連の真中に位置する秀作といえ、總持寺草創に関わる記念碑的存在としても重要な尊像である。

【永光寺瑩山紹瑾禅師像】（石川県指定文化財）

洞谷山永光寺（石川県羽咋市）は、瑩山紹瑾禅師が總持寺を開創する以前、正和二年（一三一二）能登の地頭酒勾八郎頼親の娘平氏女（黙譜祖忍尼）が鹿島郡酒井保の土地を寄進し、翌年、瑩山禅師が仮屋（茅屋）を建てたことに始まる。その後文保二年（一三一七）に瑩山禅師が加賀大乘寺より移って永光寺が開創されたという。瑩山禅師は正中二年（一三二五）、当山で示寂、裏山には開山塔（墓塔）が建つ。

山内の法堂（本堂）背後の高所に貞治五年（一三六六）に創められたという伝燈院（開山堂）があり、天童如浄、永平道元、孤雲懐奘、徹通義介、瑩山紹瑾の五老峰所縁の五軀と、瑩山弟子の明峯素哲、峨山韶碩ら像と位牌が祀られている。像は所謂、頂相彫刻の作例である。頂相（ちんそう）は如来の頂の相の意味でうかがうことの出来ないものをいう

が、禅宗では禅僧の肖像画を指し、師から弟子に嗣法の認証として、賛文を付して授けられるものであった。その形式は椅子に坐して法衣を前に垂らし、法具を執って威儀を正す全身像がもっとも多く、通常は頂相といえこれ指す。そしてこの形姿を踏んだ頂相彫刻も盛んに造像され、寺院やその塔頭などに開山像、祖師像、派祖像といった形で多数安置されるようになった。永光寺伝燈院（開山堂）は曹洞宗におけるその大規模な古例といえようか。

瑩山紹瑾禅師坐像は、像高七六・四cm、頭頂～裳先一一〇・六cmを測る等身大の像である。円頂で、法衣の上から環のついた袈裟を着け、左手は膝上に置き掌を上指を軽く握り、右手は膝上で掌を下指を曲げて如意を執る。この形状から元は扠子ないし竹篋を執っていたともみられる。衣の袖裾を前方に垂らして椅子に坐す。

寄木造で玉眼を嵌入する。その構造は、頭体幹部を耳後方をとおる線で前後に矧ぎ、衣の襟に沿って割首とし、両肩から腰までの体側部を矧ぎ寄せ、脚部に横一材を矧ぎ、衣垂下部を矧ぎ、両袖口部、両手首を足す。像内は前後の体幹材に束を彫出して雇柄で連結する構造にする。頭体の像内を綺麗に内割りして、布張りを施し漆塗りで固めている。彩色像とおもわれるが、現状は肉身・着衣ともベンガラ系の漆塗りで、全体に赤褐色を帯び、袈裟の一部などに黒彩色が入る。

像の衣垂下部の右裏につぎの白色の書銘がある。

「開山尊像明峯大和尚裏書／釈迦牟尼佛五十四世法孫大乘二代洞谷山開闢／真像正中二年八月十五日巳剋於当寺□偈／[]」

この銘は永光寺二世明峯素哲の裏書きで、本像が永光寺開山瑩山紹瑾禅師の像で、亡くなった正中二年（一三二五）の真像、すなわち示寂直前の容貌を写しとった像であることがしめされている。

このことを証明するように、本像の丸い頭部をやや平たく押しつぶしたような形は、總持寺伝存の元応元年（一三一九）自賛になる瑩山紹瑾頂相画（重要文化財）と合い通ずるようにみえる。また、正中二年（一三二五）、示寂の直前に描かれた自賛像である能登東嶺

寺像とも容貌に共通性が十分に感じられる。

さらに、彫刻としての生々しさは、理想化を用いない頭部の微細な肉付けに表われ、頭部の左耳後方には大きな疣が表現されていて、像主に対する克明な刻写に驚かされる。像主の直近にあって、その容貌や性格などについてもよく周知の者が造像に関わっていなければ、本像は出来ないであろう。

また、体部の造形もゆったりとしつつも、厳格さをそこなわないまとまり良さが感じられる。法衣、袈裟の着装表現や、衣文の構成、さばきには洗練された切れの良さが感じられ、作者の高い技量を推し量ることが出来る。

本像の制作は、銘文にある正中二年（一三二五）頃とみられ、作者については、像内に独特の像心東はないものの、前後材を東から出した雇柄で繋ぐ点などが院派仏師の特徴と通ずることから、当時、永光寺瑩山紹瑾禅師と密接な関係にあったと考えられる彼らの作とするのが妥当であろう。

なお、本像のほかに安置される像のうち中世制作の像は、貞治五年（一三六六）の年記を有する峨山韶碩像と、作風から同じ手になるとみえる明峯素哲像が南北朝期の制作、徹通義介像はそれらとやや降る室町時代の制作とみられている。これらは、いずれもその容貌には理想化がみられ、着衣や衣文表現も形式的となり、また、造形の洗練性も瑩山紹瑾像にはおよばない別趣の像である。

【禅宗の代表的な安置仏像（仏殿・本堂）】

〔本尊〕 釈迦如来像（宝冠釈迦・毘盧舎那仏）

三尊の場合の脇侍 文殊菩薩・普賢菩薩

観音菩薩・虚空蔵菩薩

迦葉尊者・阿難尊者

〔両脇〕 達磨大師・大権修理菩薩

平成28年度 仏教文化研究所公開シンポジウム 『曹洞宗の文化財』

「宝物殿開館記念、二つの展示会 ―横尾忠則個展と總持寺秘宝展―

鶴見大学仏教文化研究所 客員研究員 尾崎正善

はじめに

本シンポジウムの主題は「曹洞宗の文化財」であり、本来ならば曹洞宗の文化財の紹介を行わなければ成らないかと思う。

しかし、今回の発表はそれを展示する宝物殿（現・宝蔵館「嫡々庵」）についての発表となった。それは、曹洞宗の文化財を展示する、總持寺の宝物殿に関して調査したところ、その開館の経緯や開館記念の展示会、さらにその後の展示会の歴史について、今まで余り公になっていないことが判明したからである。

今回、そうした宝物殿初期の状況について発表したいと思う。

1. 宝物殿（現・宝蔵館「嫡々庵」）の開館

昭和51年（1976）開館 ―總持寺開山瑩山禪師六百五十回大遠忌の記念事業

落慶法要は、昭和49年（1974）9月27日

「跳龍」昭和49年11月号

「京浜新聞」昭和49年10月10日号

2. 横尾忠則個展について 横尾忠則（1936～）

①横尾忠則個展の広告・記事

1) 横尾忠則個展 展示会広告（神奈川新聞・昭和51年12月26日）

「横尾忠則個展」（案内）

主催 三進

後援 大本山總持寺・神奈川新聞社・白字会



個展図録

2) 横尾忠則個展 展示会記事（神奈川新聞・昭和五十年十二月三十日）

「元旦から總持寺宝物殿で 闇と光の世界へ 横尾忠則 イメージ新し個展」

元旦にオープンする横浜・鶴見の大本山總持寺宝物殿で、開館記念の「横尾忠則個展」が三進主催、神奈川新聞社などの後援によって一日から十五日まで開かれる。宝物の小仏像と横尾氏の作品を組み合わせるユニークな形式で、このところ宗教色の濃い作品を描き続けている横尾氏にとっても初めての試み。（中略）

”無神論者”だった横尾氏と宗教との出会いは五年前にさかのぼる。四十五年一月、交通事故にあい一年半の闘病生活。創作への”禁欲状態”の中で、自分自身への問いかけを通じて”内なる世界”に目を開き、宗教的なものに関心を持ち始める。その結果、作風も大きく変容した。（中略）

個展には、これら四十六年以降の近作の中から、ポスター、版画百四十五点のほか、ほんの装丁、レコードのジャケット、雑誌のイラストなどの小型グラフィック多数も出品され、ポスター、版画の一部はケースに入った展示仏像の背景として使われる。

横尾氏自身もこの企画には大いに乗り気で「寺の宝物殿という特異な環境の中で、しかも仏像と組み合わせるとするのは面白い着想。デパートやギャラリーで見るのとどのように違った形で観客の目にうつるか楽しみ」という。

十カ月前から本格的にヨガに取り組んでいる横尾氏だが、この個展の下見に總持寺を訪れた十月末には、同寺で一週間参禅。（中略）

なお、個展は除夜の鐘のさ中の午前零時オープンという。これも異例の形式で、初もうで客に思いがけない楽しみが出来ることになる。▽横尾忠則個展は、大人二五〇円。学生一五〇円

3) 横尾忠則個展 展示会ポスター記事（週刊プレイボーイ・昭和51年1月合併号）

横尾忠則（イラストレーター）のポスター

「正月元旦から十五日まで、鶴見・總持寺で開かれる個展のためのポスター。金色に輝く大判サイズ。もちろん限定版、30名の読者に。」

4) 横尾忠則個展 展示会再開催記事 (週刊プレイボーイ・昭和 51 年 2 月 10 日号)

特報 大好評! 横尾忠則個展アンコール開催

この一月、川崎鶴見の總持寺で、横尾忠則個展が開催された。總持寺は曹洞宗大本山。宝物殿新築が成ったのを記念して、世界的な画家、イラストレーター横尾忠則氏の個展を開いたもの。同氏は、オカルトなど精神界のことに強い関心を持っており、画風にもそれが現れているが、同寺に一週間参禅したこともある。お寺と最先端に行くイラストレーターという、一見奇妙な取り合わせができたのは、これが機縁らしい。

さて、この個展、大変な好評だったが、見逃した者も多く、再開催を望む声が強まっていた。そこで、同寺では2月1日～11日(午前10時～午後5時)、もう一度この個展を開くことにした。本誌に連載された「うろつき夜太」のさし絵原画はじめ、ユニークな作品がずらり。

横尾氏のサイン会もあるし、抽選で20名に同氏の豪華な作品集(2千円)をプレゼントしてくれるというから、ぜひ總持寺まで出かけてみよう。場所は鶴見駅下車、西口すぐそば。

5) 「日刊スポーツ」昭和 51 年 2 月 6 日 (タイトルのみ)

禅寺とサイケと

一風変わった横尾忠則の世界「總持寺でのイラスト展」

神秘…演出効果は満点

大ウケ、前衛音楽も *1日、1000人の来館者がいたと記す



7) 「跳龍」昭和五十一年三月号「本山だより」

個展ポスター

「横尾忠則個展」

こんど本山の中に管理部という一部門が設けられ、瑞応殿、宝物殿、駐車場などの管理運用を通し、より多くの人々から本山に足をはこんでもらい、親しんでいただくための企画を担当することとなった。その一つの試みとして、四月の開館を待つ宝物殿において横尾忠則個展が開催された。

元旦午前〇時〇分開館というだけでも一般世間では考えも及ばない奇抜なアイデアだが、横尾氏独特の幻想的な作品が古びた仏像とまことによく調和し、奥床しい香のかおりと現代音楽が渾融する空調完備の会場は余所のどこをさがしても見つかるまい。

「これまで何度も個展を開いたが、デパートなどのゴタゴタしとところとちがい、一步門をくぐれば町の雑踏を忘れさせる静かなご本山の、しかもすばらし宝物殿で、仏像とマッチした作品展示ができたことはほんとによかった・・・」と横尾氏は語るが、さらに作家の柴田錬三郎氏や写真家の篠山紀信氏も同じように激賞された。

個展は一応一月十五日で終わったが、こんなすばらし個展を半月で終わらせるのはもったいないとの部外の声が多く、二月一日から十一日まで再開された。

8) 「跳龍」昭和五十一年三月号

「禅師さま起居万福」 「横尾忠則展をご覧になる禅師さま」と題して、写真が掲載。

同号、「編集後記」

「宝物殿開設を記念して、四月十日から五月五日まで「總持寺秘宝展一禅・瑩山禅師の世界一」を開催することとなった」

*短い紹介記事あり。

②横尾忠則個展の背景

1) 坐禅の記録

『我が坐禅修行記』昭和 53 年 5 月 8 日 (講談社)

昭和 53 年 6 月 29 日、第二版

『坐禅は心の安楽死』平成 24 年 10 月

(平凡社・再版)



2) 参禅の記録

總持寺・永平寺別院長谷寺・青苔寺など

3. 總持寺秘宝展について

①總持寺秘宝展関係書類（昭和 51 年度・庶務案書綴（一）監院寮）

*總持寺秘宝展に関する案書（番号は、案書の通し番号）

14.宝物殿開館記念の予告を曹洞宗報に掲載の件（昭和 51 年 2 月 23 日）

15.宝物殿展示品出品依頼出張の件（昭和 51 年 2 月 25 日）

25.祖院・永光寺・大乘寺、三ヶ寺に「總持寺秘宝展」展示品依頼状等発送の件
（昭和 51 年 3 月 11 日） *出品依頼状及び一覧表添付

27.宝物殿開館特別展観の件

32.總持寺秘宝展ポスター発送の件

33.總持寺秘宝展展示品出品依頼の件

*依頼状・出品借用書・出品依頼状送付先リスト

40.總持寺秘宝展収支決算報告書

51.宝物殿秘宝展御協力、御出品各御寺院に函録を送ってよろしいか



秘宝展図録

②開催趣旨（27.宝物殿開館特別展観の件）

御開山瑩山禪師六百五十回大遠忌記念事業として一昨年十月宝物殿の落慶をみた。

而して昨年八月より宝物殿内部の展示用施設の拡充、空調機械設備の調整、知庫寮倉庫から宝物殿収蔵庫への寺宝の引越等の試行期間を経て、今年正月「横尾忠則個展」を開催する運びとなった。しかし、これは宝物殿運営の側面とみるべきであろう。本山初詣行事の一環として本山が地域社会並びに世間一般の人々との接点を求める新しい試みとして出来たもので、この展覧会は本山が禪を求める多くの人々に仏法、本山とは何かを広く理解していただく手がかりとしての行事であった。

しかるに半面、宝物殿建立には宗門各位の力添によって落慶をみたことも事実である。よって宗門人を対象とする宝物殿披露並びに開設記念展観が強く望まれるようになった。

以上の点を考慮して、展観準備期間等も不十分ではあるが、四月十日授戒啓建の日より五月五日まで開館披露するのが適当な月日ではないかと思われる。

ここに宝物殿専門員諸師との親密なる検討を重ねた結果、この展観啓業の記念に最も良い企画は何か……。宝物殿落慶の経緯よりして、ご開山瑩山禪師の世界と題してご真筆、ご遺品を中心に可能な限り一堂に会えし、もってご開山への報恩のまことを捧げる記念展観とするのが一番相応するのではないかと……

かような主旨で本山最初の本格的展覧を企画立案したものである。

この「總持寺秘宝展」—瑩山禪師の世界—の特別記念展観啓業が仏々祖々が単伝した法が現代に強く現成される。序章として宗門古仏の仏法の原点を深く理解することは法孫として努めであろうと考えます。

- 一、期間 昭和五十一年四月十日—五月五日迄
- 一、場所 大本山總持寺宝物殿
- 一、名称 「總持寺秘宝展」—瑩山禪師の世界—
- 一、管理並運営 管理部中心として
- 一、協力 全山 宗門 等
- 一、拝観料 無料

秘宝展ポスター



③展覧会実績の記録（40.總持寺秘宝展収支決算報告書）

一、拝観者数並浄財金等収入

総計 6606 人 1 日平均拝観者数 約 216 人

浄財金 640650 円 函録 376700 円 ポスター 24800 円 総計金 1042150 円

④「跳龍」昭和五十一年五月号「本山だより」

「宝物殿開館される」

瑩山禪師六百五十回大遠忌記念事業の一つとして一昨年落慶した宝物殿は、その後内部展示施設の拡充、空調機械設備の調整等の試行期間を経て、このたび館長逸見梅栄先生を迎え、開館された。

四月十日より展観啓業の記念展「總持寺秘宝展」が五月五日まで開催されている。

⑤『總持寺秘寶展—瑩山禪師の世界—』 出品目録

- 1.木心乾漆 僧形觀世音菩薩坐像 祖院
- 2.天童如淨和尚語録 總持寺
- 3.木造 瑩山紹瑾禪師倚像 永光寺
- 4.木造 明峰素哲禪師倚像 永光寺
- 5.木造 峨山韶碩禪師倚像 永光寺
- 6.提婆達多像 總持寺
- 7.總持寺中興縁起 總持寺
- 8.正法眼蔵』諸法実相の卷の斷簡 總持寺
- 9.仏垂般涅槃略説教誡經 總持寺
- 10.仏祖正伝菩薩戒作法 大乘寺
- 11.示紹瑾長老 大乘寺
- 12.嗣書の助書 広福寺 (影印本)
- 13.瑩山禪師 御袈裟 祖院
- 14.瑩山禪師 珪砂行李 祖院
- 15.瑩山禪師 御絡子 永光寺
- 16.道元禪師 螺鈿袈裟箱 祖院
- 17.如淨禪師 扨子 大乘寺
- 18.道元禪師 扨子 大乘寺
- 19.義介禪師 扨子 大乘寺
- 20.瑩山禪師 扨子 大乘寺
- 21.明峰禪師 扨子 大乘寺
- 22.素哲請取状 大乘寺
- 23.伝光録
- 24.前田利家像 總持寺
- 25.前田利家夫人像 總持寺
- 26.法衣相伝書 広福寺 (影印本)
- 27.洞谷山尽未来際置文 永光寺
- 28.木彫 十一面觀世音菩薩 永光寺
- 29.哲首座立僧普説 広福寺 (影印本)
- 30.素哲僧祿状 大乘寺
- 31.洞谷山讓状 大乘寺
- 32.峨山禪師御袈裟 祖院
- 33.峨山禪師頂相 總持寺
- 34.總持寺讓状 總持寺
- 35.總持寺十箇条之亀鏡 總持寺
- 36.仏祖正伝菩薩戒教授文 海岸寺 (影印本)
- 37.洞谷文書注文 永光寺
- 38.洞谷山寄田注文 永光寺
- 39.洞谷山勤行条文 永光寺
- 40.洞谷山松樹禁制文 永光寺
- 41.金銅五鈷鈴 祖院
- 42.瑩山清規写本 大乘寺
- 43.瑩山清規写本 大乘寺
- 44.鎌倉彫獅子牡丹文香合 永光寺



石川県立美術館



日本橋三越



第2回 秋の特別展観

- 45.洞谷記写本 大乘寺
- 46.瑩山禪師自賛画像 總持寺
- 47.瑩山禪師自賛画像 東嶺寺
- 48.示性禪姉公偈 總持寺
- 49.三木一草事 個人蔵 (影印本)
- 50.韶陽折脚之画賛 永光寺
- 51.龍天白山之書 千光寺 (影印本)
- 52.後村上天皇勅書 永光寺
- 53.後桃園天皇勅書 總持寺
- 54.明治天皇勅書
- 55.住山記

4. 總持寺関係特別展について

* 図録・ポスター・「跳龍」誌上等で確認できるもの

① 總持寺展

本山第二祖国師峨山紹碩禪師600回大遠忌記念事業の一
 会期：昭和39年(1964)8月1日～9月13日
 会場：石川県立美術館
 主催：石川県立美術館・大本山總持寺
 後援：北国新聞社等
 展示品：88点
 図録：『總持寺展』

② 總持寺宝物展

本山第二祖国師峨山紹碩禪師600回大遠忌記念事業の二
 会期：昭和40年(1965)3月23日～3月28日
 会場：日本橋三越本店・7階ギャラリー
 主催：大本山總持寺・大本山總持寺大遠忌奉賛会
 後援：読売新聞社・報知新聞社・文化財保護委員会
 展示品：絵画33点・書跡36点・工芸18点・彫刻10点
 図録：『總持寺宝物展』

③ 大本山總持寺宝物殿開設記念 横尾忠則個展

会期：昭和51年(1976)1月1日～1月15日・2月1日～11日
 会場：大本山總持寺宝物殿
 主催：三進
 後援：大本山總持寺・神奈川新聞社・白字会
 図録：『横尾忠則』

④ 大本山總持寺宝物殿開設記念 總持寺秘宝展—瑩山禪師の世界—

会期：昭和51年(1976)4月10日～5月5日
 会場：大本山總持寺宝物殿
 図録：『總持寺秘宝展—瑩山禪師の世界—』

⑤ 第2回 總持寺秘宝展 秋の特別展観

会期：昭和51年(1976)10月9日～11月3日
 会場：大本山總持寺宝物殿

⑥ 第3回 總持寺秘宝展 奉修記念天童如淨禪師750回忌

会期：昭和52年(1977)5月1日～5月31日
 会場：大本山總持寺宝物殿



第3回 天童如淨禪師



第4回? 歴代住持墨跡展



第6回 かたちの世界

*第4回・第5回、不詳。逸見梅栄氏の死去に伴う混乱のためか。

昭和52年(1977)5月1日～5月31日、歴代禅師の墨跡展が行われている。これが第4回か?

⑦第6回 總持寺秘宝展 かたちの世界

会期：昭和53年(1978)10月10日～11月5日

会場：大本山總持寺宝物殿

⑧第7回 總持寺秘宝展 仏像 いのりの世界

会期：昭和54年(1979)10月12日～11月11日

会場：大本山總持寺宝物殿

図録：『仏像 いのりの世界』



第7回 いのりの世界

⑨第8回 特別展観 禅と茶道—わびのこころ

会期：昭和55年(1980)10月10日～12月21日

会場：大本山總持寺宝物殿

⑩御移転100年記念 曹洞宗大本山總持寺名宝100選

会期：平成23年(2011)4月16日～5月22日

会場：神奈川県立歴史博物館

主催：曹洞宗大本山總持寺・鶴見大学仏教文化研究所・神奈川県立歴史博物館

図録：『御移転100年記念 曹洞宗大本山總持寺名宝100選』

⑪御移転100年記念 總持寺宝物展

前期 独住禅師墨蹟中心

会期：平成23年(2011)6月～8月

後期 移転後資料中心

会期：平成23年(2011)9月～11月

会場：大本山總持寺宝物殿



第8回 禅と茶道

⑫ 開祖瑩山紹瑾禅師700回

二祖峨山韶碩禅師650回遠忌記念

『禅の心とかたち—總持寺の至宝—』

旗揚げ展

会期：平成28年(2016)3月16日～3月22日

会場：大本山總持寺仏殿

鎌倉会場

会期：平成28年(2016)4月23日～5月29日

会場：鎌倉国宝館

名古屋会場

会期：平成28年(2016)10月15日～11月27日

会場：名古屋市立博物館

おわりに

「横尾忠則個展」と「總持寺秘宝展—瑩山禅師の世界—」をどのように位置づけるか。

五〇年前にすでに内外に積極的に曹洞宗・總持寺の文化財及び禅の思想を発信して行く方向性が示されていたのではないか。

今回の大遠忌においても、現代アート(EXHIBITION)や「鶴見萬燈の夕べ」が行われ、『禅の心とかたち—總持寺の至宝—』が開催されたのは、同一の方向性に基づくものと思える。

宝蔵館嫡々庵のこと—課題と将来について—

遠藤 ゆかり

【宝蔵館嫡々庵について】

(役割) 總持寺所蔵の文化財を管理している施設(部署)

文化財の保存、修理、展示、収集など文化財に関連する業務 ほか

(所蔵資料) 絵画、彫刻、工芸、古文書など多岐にわたる

特徴として … 伝世の文化財、近代施入の文化財に大きく二つに分かれる。

(施設情報) 展示替えは年4回

開館日：土曜日、日曜日、祝日、行事中

休館日：木曜日、金曜日(祝日・行事中は除く)、年末

開館時間：10時～16時30分(受付は16時まで)

※休館日以外の平日(月曜日・火曜日・水曜日)は予約制

【現在の問題点】

①設備の老朽化

空調設備の老朽化、展示ケースの老朽化、収蔵庫の限界 など

②所蔵資料の状態

修復が必要な資料が多い、未整理の資料がある など

③立地、知名度

僧堂の隣にある、諸堂拝観のルートに組み込まれていない など

【今後に向けて】

①施設の再整備 … 収蔵庫の拡張、空調設備・展示ケースを新調 など

②所蔵資料充実 … 整理、調査、修復、購入 など

③広報活動 … 定期的に展覧会を開催する など

三橋鎌岳作・獅子牡丹唐草彫木前机と近代の鎌倉彫について

室瀬 祐

1 鎌倉彫とは

- ・彫木漆塗
- ・堆朱と鎌倉彫

2 鎌倉彫の技法

- ・彫

木地(桂、銀杏、檜、楓、梅、欖)

小刀、平刀、丸刀、薬研彫、キメ彫、片切彫、後藤彫、三橋彫、重ね彫り

- ・塗

乾口塗り、堆烏塗り、堆金塗り、鎌倉式朱蒔、炭粉蒔地

3 鎌倉彫の歴史

- ・ [古例] 建長寺須弥壇、円覚寺・天竺牡丹透彫前机
- ・ 第一回内国勸業博覧会(明治 10, 1877)に後藤斎宮、三橋鎌山が出品

4 後藤家・三橋家

- ・ 後藤家

斎宮(1841～1912)、運久(1868～1947)、俊太郎(1923～2006)

- ・ 三橋家

鎌山(1845～1914)、鎌岳(1875～1938)、央鎌山(1903～1965)、昌山(1942～)

5 三橋鎌岳作 獅子牡丹唐草彫木前机

- ・ 材質：欖、桂
- ・ 制作時期

1915(大正 4 年)、仏殿(大雄宝殿)落慶に合わせての制作か

鶴見大学仏教文化研究所・大本山總持寺宝蔵館「嫡々庵」 共催
平成28年度公開シンポジウム講演資料集
「曹洞宗の文化財」

発行日 2016年6月11日
編集・発行 鶴見大学仏教文化研究所
〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3
E-mail: bukken@tsurumi-u.ac.jp